

Pfizer



子 育てハンドブック

監修 **藤野 泰人**

(東京大学大学院 農学生命科学研究科 獣医内科学研究室)

年 月 日生まれ

お名前

ちゃん

ファイザー株式会社

〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7 <http://www.animalhealth.pfizer.co.jp/pet>

子猫を飼いたいなら、知っておきたいこと

これから子猫との生活を始める飼い主さん、
猫ちゃんを飼われるのは初めてですか？

- 猫ってどんな生き物？
- 必要な健康管理は？
- どんな世話がいるの？
- しつけはどうするの？

子猫のかわいさに夢中になりながらも、
いろいろな疑問や不安を
感じておられるのではないのでしょうか。
このハンドブックは、
そんな飼い主さんのために、
子猫を飼うにあたって、最低限、
知っておきたいことをまとめています。
参考にしながら、猫ちゃんとの暮らしを
ぜひ楽しく快適なものにしてください。



I N D E X

猫種や性別による特徴 性格や行動の違いを知りましょう	4
子猫の成長ステップ あなたの猫ちゃんは今、どの段階ですか？	6
寄生虫駆除とワクチン 子猫を迎えたら、まず動物病院で健康診断を	8
猫にうつる主な内部・外部寄生虫 こんな寄生虫が猫ちゃんをねらっています	10
猫にうつる主な感染症 子猫にとって危険な感染症がたくさんあります	12
子猫の食事 食事は成長段階に合わせて	14
子猫のしつけとケア しっかりしつけましょう！ 子猫の時から慣れさせて	16 17
ズーノーシス予防 猫から人にうつる病気にも注意しましょう	18

性格や行動の違いを知らしましょう



猫種による違い

犬ほど多くはありませんが、猫にもさまざまな種類があり、それぞれ固有の身体的特徴や性格を持っています。もちろん個体差があるので一概にはいえませんが、一般に、短毛種は活発で遊び好き、長毛種はおっとり物静かな猫が多いようです。

お手入れの面でも、短毛種はクシで毛をとかす程度ですみますが、毛玉のできやすい長毛種では、毎日のブラッシングや定期的なシャンプーが欠かせません。長毛種を飼う場合には、飼い主さんにもその覚悟が必要です。



性別による違い

オス・メスによる大きな違いは、性成熟後に出きます。メスは、年3~4回、発情期を迎えますが、発情すると、人に体をくねくねとこすりつけたり、腰を突き上げるポーズをしたり、人間の赤ちゃんのような大声で鳴きます。一方、オスには決まった発情期がなく、発情したメスに刺激されて発情します。メスを求めての放浪、オスどうしのケンカ、強烈なおいのオシッコをあちこちにかけるスプレー行為（尿マーキング）などが見られます。

もし繁殖の予定がなければ、発情期のトラブルの防止や、病気予防のためにも、避妊・去勢手術をおすすめします。

手術の時期は、オスは、マーキング行動が出る前の生後7~8ヵ月、メスは、初発情が来る前の生後6ヵ月ぐらいがめやすとなりますが、性成熟には個体差がありますので、かかりつけの動物病院でご相談ください。



主な猫種と特徴

短毛種

アビシニアン

エチオピア原産。野性的でスリムな体型。好奇心が強く活動的、頭がいいのも特徴。

アメリカンショートヘア

アメリカ原産。大きな頭、丸い目、力強い体格を持つ。性格は陽気で人なつっこい。

シャム

タイ原産。顔としっぽのポイントカラーが特徴。感受性が強く、鳴き声が大さい。

スコティッシュフォールド

イギリス原産。丸い顔、前方に折れた小さな耳が特徴。穏和で人なつっこい性格。

日本猫

日本原産。性格は穏和。頭もよく順応性があり、飼いやすい。

ロシアンブルー

ロシア原産。美しいブルーグレーの被毛。内気で飼い主に忠実。ほとんど鳴かない。

長毛種

ペルシャ

アフガニスタン原産。大きな目、扁平な顔と豪華な被毛が特徴。穏やかで物静か、ほとんど鳴かない。

ヒマラヤン

イギリス原産。ポイント以外の特徴は、ペルシャと同じ。穏和でおっとり。

メインクーン

アメリカ原産。大柄な体格に似合わず、優しい鳴き声。性格は優しく人なつっこい。

ラグドール

アメリカ原産。人に抱かれるのが大好き。おとなしく鳴き声も静かで、人によくなつく。

あなたの猫ちゃんは今、



どの段階ですか？

	体の変化
誕生	
1週齢	●目が開く
2週齢	●歩き始める
3週齢	●乳歯が生え始める
4週齢	●自力で排泄できるようになる
5週齢	
6週齢	
7週齢	
8週齢	●乳歯が生えそろう
2ヵ月齢	
3ヵ月齢	●永久歯が生え始める
4ヵ月齢	
5ヵ月齢	
6ヵ月齢	
7ヵ月齢	
8ヵ月齢	●永久歯が生えそろう
9ヵ月齢	
10ヵ月齢	
11ヵ月齢	
12ヵ月齢	

成長ステージ	健康管理	
授乳期		
	社会化期 猫どうし、あるいは人や犬など、他の動物と接することで、つき合い方を学ぶ大切な時期。飼い主との信頼関係もこの時期に形成されるので、しっかりスキンシップを。	
		●検便と寄生虫駆除※1
離乳期		
		●1回目ワクチン接種※2
		●2回目ワクチン接種※2 (1回目から3~4週間後)
成長期		●避妊手術
	メスの性成熟期	
		●去勢手術
	オスの性成熟期	

※1：ノミ・フィラリア・回虫・ミミヒゼンダニを駆除・予防できるファイザーの「レボリューション6%」は、6週齢から使用できます。

※2：ファイザーの3種混合ワクチン「フェロセル」は9週齢から接種できます。

子猫を迎えたら、まず動物病院で健康診断を



寄生虫駆除・予防の徹底

おうちを迎えた猫ちゃんのおなかパンパンに膨れていたたり、下痢をしたり、便に白いゴマのような粒々が混じっていたりすることはありませんか？ また体にノミがついていたたり、耳をしきりにかいたりすることはないでしょうか？

こうした異常が見られた時はもちろんですが、一見、元気そうに見えても、子猫を迎えたら、まず動物病院で健康診断を受けるようにしましょう。

子猫の場合、寄生虫に感染すると特に被害が大きくなります。外猫を保護した場合はもちろん、ショップで購入したり、譲ってもらった子猫の場合でも、母猫から感染しているケースがあるので、安心はできません。

病院で検査・検便を受け、寄生虫の駆除・予防を徹底しましょう。



2回のワクチン接種

ワクチンとは、毒性を弱めた病原体を体内に入れ、その病原体に対する免疫抗体を作って、病気を予防するものです。

子猫は母猫から初乳を通じて、抗体をもらっていますが(移行抗体)、これは生後2~3ヵ月でなくなってしまう。

そこで、移行抗体の切れる生後2~3ヵ月ごろに1回目、その3~4週間後に2回目のワクチンを接種し、体力のない子猫を危険な病原体から守ります。その後は年1回の定期的な接種が望めます。

現在、ワクチンがあるのは「猫カリシウイルス感染症」「猫ウイルス性鼻気管炎」「猫汎白血球減少症」「クラミジア感染症」「猫白血病ウイルス感染症」の5つ。なかでも重要な3つの感染症(「猫カリシウイルス感染症」「猫ウイルス性鼻気管炎」「猫汎白血球減少症」)は、「3種混合ワクチン」によって予防できます。

こんな寄生虫が

**体表に寄生するものと、
体内に寄生するもの**

猫が感染する寄生虫には、様々な種類があります。

ノミやダニなどのように体表に寄生して、かゆみや皮膚トラブルを引き起こす「外部寄生虫」。また、主に腸管内などの体内に寄生して、下痢や腹痛、嘔吐などの体調不良をもたらす「内部寄生虫」。

愛猫をねらう寄生虫について、知っておきましょう。

外部寄生虫**ノミ**

吸血されると、かゆいだけでなく、貧血を起こしたり、毛づやが悪くなったりすることもあり、子猫の場合は特に深刻です。またノミの唾液に反応して、ノミアレルギー性皮膚炎を起こすと、激しいかゆみと湿疹、脱毛などの症状が見られます。

**ミミヒゼンダニ**

猫の外耳道に寄生し、激しいかゆみを伴います。しきりに頭を振ったり、頻繁に耳を後ろ足でひっかけたりする症状が見られます。黒い耳あかが出るのも特徴。接触によって感染します。

**内部寄生虫****フィラリア（犬糸状虫）**

蚊が媒介する犬の心臓の寄生虫で、放置すると死に至る恐ろしい病気です。猫にも感染し、症状は犬よりひどくなる場合が多く、食欲不振や呼吸困難を起こし、急死することもあります。

回虫

他の感染猫から排泄された虫卵を食べたり、感染した母猫からの授乳によっても感染します。一度も外に出たことのない子猫だからといって、安心できません。特に子猫の場合、下痢や腹痛、発育不良をもたらすことがあります。

瓜実条虫

ノミが媒介する寄生虫で、50cm以上になることも。感染猫の便には、片節と呼ばれる白ゴマのような粒々が見られ、この中には虫卵が詰まっています。ノミの幼虫がこの片節を食べて成長し、そのノミを猫が毛づくろいの際に誤飲することで感染。下痢や嘔吐の症状が見られます。

コクシジウム

原虫の仲間。感染猫の便にオーシストと呼ばれる卵に当たるものが排泄され、それが猫の口の中に入ることによって感染します。水様の下痢や血便を起こし、重症では死に至ることもあります。



猫ちゃんをねらっています

有効成分「セラメクチン」配合

レボリューション® 6% は

優れたノミ駆除効果のスポット剤。

同時に、フィラリア、回虫、ミミヒゼンダニから
猫をまもります。

6週齢の子猫から使用可能



動物用医薬品 要指示



子猫にとって危険な感染症がたくさんあります

**定期的なワクチン接種と
完全室内飼いで予防を**

猫がかかると感染症には、死亡率の高い危険な病気もたくさんあります。

定期的なワクチン接種と、感染猫との接触を防げる完全室内飼いで、愛猫を怖い病気から守りましょう。

ワクチンのない病気**猫伝染性腹膜炎**

感染猫の排泄物や、唾液・鼻水などの分泌物から感染。感染してもほとんどの猫は発症しませんが、いったん発症すると、多くは死に至ります。

症状は、お腹に大量の腹水がたまる“ウェット”型が多いですが、中枢神経や目に異常をきたす“ドライ”型もあります。

**猫免疫不全ウイルス感染症
(猫エイズ)**

多くは、猫どうしのケンカのかみ傷から感染。初期には発熱、リンパ節の腫れが見られ、その後、長い無症状キャリア期を経て、“猫免疫不全症候群”と呼ばれる時期に入ります。口内炎、慢性の下痢など、抵抗力の低下が招く様々な症状が現れ、次第にやせ衰えて死に至ります。

感染しても一生発症せず、“無症状キャリア”のままの猫もいます。

**ワクチンのある病気****猫カリシウイルス感染症***

飛沫感染、空気感染など。初期症状は、くしゃみ・鼻水・咳など、ウイルス性鼻気管炎と似ていますが、ひどい場合は口内炎や舌炎、肺炎を起こして、死に至ることもあります。

猫ウイルス性鼻気管炎*

感染猫のくしゃみや咳による飛沫感染が主。いわゆる“猫風邪”と呼ばれる病気で、症状は、くしゃみ・鼻水・咳のほか、口内炎や結膜炎など。死亡率はそれほど高くありません。

猫汎白血球減少症*

感染猫の排泄物や、土中にいるウイルスから感染すること。高熱・嘔吐・激しい下痢を繰り返し、子猫の場合は、きわめて死亡率の高い怖い病気です。

クラミジア感染症

主に感染猫との接触でうつります。結膜炎が代表的な症状ですが、くしゃみ・鼻水・咳や肺炎を起こすことも。重症化すると死亡することもあります。

猫白血病ウイルス感染症

唾液中にウイルスが多く含まれ、グルーミングやケンカなどで感染。感染初期に、発熱や元気喪失などの一過性の症状が見られますが、すぐに回復し、その後、数ヶ月～数年を経て再発症。著しい免疫力の低下、貧血、白血病、腫瘍など、様々な病気を引き起こします。発症すると、多くは死に至ります。

★3種混合ワクチンで予防可能

動物用医薬品 要指示

9週齢の子猫から接種可能

フェロセル® CVRは**「猫カリシウイルス感染症」「猫ウイルス性鼻気管炎」
「猫汎白血球減少症」の予防に
有効な混合生ワクチンです。**

Pfizer





授乳期 (生後3週齢ぐらいまで)

離乳が済んだ子猫を迎えた場合は、授乳の必要はありませんが、生後間もない子猫を保護した場合などは、「人工授乳」が必要です。

●牛乳は使わない

与えるのは、牛乳ではなく、市販の子猫用ミルクにしてください。猫には牛乳に含まれる乳糖を分解する酵素が少なく、特に子猫の場合は下痢の原因になります。

●哺乳瓶かスポイトで

子猫用ミルクを表示の規定量に従って、猫用の小さな哺乳瓶かスポイトで与えてください。授乳回数は、一日5～6回をめやすに。

●排泄を助ける

子猫は自分で排泄できないので、ぬらしたティッシュやガーゼで肛門を刺激して、排泄を促してあげましょう。



離乳期 (生後3～8週齢ぐらいまで)

3週齢を過ぎ、体重が300～400gになると、ミルクだけの食事から、少しずつ離乳食を混ぜるようにしていきます。

離乳食は市販のものもありますし、子猫用のドライフードをお湯でふやかして柔らかくしたものでかまいません。また手作りするのなら、ゆでた鶏のささみや白身の魚などを細かく刻んで、猫用ミルクであえてもいいでしょう。初めは、人の指先につけたり手のひらで与え、子猫が慣れてきたら



徐々に皿で食べさせるようにします。

6～8週齢をめどに、完全離乳できるようにしましょう。



成長期 (8週齢～12ヵ月齢)

8週齢～12ヵ月齢までは、成長期に当たります。特に6ヵ月ごろまでは育ち盛りの急成長期で、この時期の子猫は、単位体重(1kg)当たり、成猫の約2倍のエネルギーが必要です。

食事には、成長期用に作られた、消化性に優れ、高タンパクの子猫用フードを与えてください。また、子猫の口や体は小さく、一回に食べられる量も消化できる量も限られています。一日分の給与量を3～4回に分けて与えましょう。

6ヵ月を過ぎると、成長スピードは落ちてきます。体も大きくなり、一見、成猫のように見えますが、まだ成長段階ですので、引き続き栄養価の高い子猫用フードを与えましょう。



猫に与えてはいけない食べ物

- ネギ類 赤血球を壊し、血尿や貧血の原因になります。
- 貝類 アワビやサザエなどに含まれる毒素が皮膚病を引き起こすことがあります。
- 青魚 与えずぎるとビタミンEの欠乏を起こし、黄色脂肪症になることがあります。
- 牛乳 乳糖を消化できず、下痢の原因に。
- チョコレート チョコレート中毒(不整脈やけいれんなど)になることがあります。
- 鶏の骨 鋭く縦に割れるため、のどや消化器官に刺さって傷つけることがあります。
- 塩分 かまぼこなどの加工品、味の濃い食べ物は、腎臓に大きな負担をかけます。
- ドッグフード 猫と犬では必要エネルギー量も栄養素も異なるため、栄養障害に。



トイレのしつけ

生後3~4週齢になると、子猫も自力で排泄できるようになります。猫用トイレと砂を用意し、人通りの少ない子猫が安心できる場所に設置してください。猫のトイレのしつけは犬よりずっと簡単です。

食後や遊びの最中に、急に部屋の隅をうろうろしたり、前足で床をかくしぐさをしたら、すぐにトイレに連れていき、上手にできたらほめてあげましょう。もしトイレ以外で粗相したら、その場で「ダメ」と言って叱ります。決してたたいたりしないでください。粗相の後はきれいにふきとり、消臭剤などで臭いを残さないように。ふきとったティッシュを猫のトイレに置き、子猫に臭いがかがせて、そこがトイレであることを覚えさせてください。



爪とぎのしつけ

大切な家具やじゅうたんで爪とぎをされるのは本当に困りもの。とはいえ、爪とぎは猫の本能なので、やめさせることはできません。

そこで、猫用の“爪とぎ”を用意しましょう。子猫がしてはいけない場所で爪をとぎ始めたら、“爪とぎ”まで連れていき、前足をもって爪をとくまねをさせ、そこが爪とぎの場所であることを教えます。トイレのしつけより大変ですが、根気よく繰り返してください。

市販の“爪とぎ”にはダンボール製、木製、布製などいろんなタイプがあり、また猫の好きなマタタビ付きのものもありますので、お気に入りのものを見つけてあげましょう。



グルーミング

ブラッシングやシャンプー、爪切り、耳のお手入れなどは、子猫の時から慣れさせないと、嫌がってさせてくれません。小さいころから十分なスキンシップをし、体中、どこでも触らせてくれるようにしましょう。

ブラシやクシを使ったお手入れも、最初は短時間から。強引に押さえつけたり、毛を引っばって痛がらせると、ブラッシング嫌いになるので、くれぐれも無理はしないこと。また水を使ったシャンプーは、体への負担もストレスも大きいので、3~4カ月齢を過ぎてからにしましょう。



歯磨き

歯磨き習慣をつけるのも、子猫の時から慣れさせることが一番です。歯が生え始めたら(3~4週齢ごろ)、口の中を触られることに少しずつ慣れさせていきましょう。

最初は、あごや口のまわりをなでることから始め、猫が気持ちよさそうにしたら、次は口の中に指を入れてみます。そして、猫が指で歯や歯茎に触られることを嫌からなくなったら、今度はガーゼを巻いた指で、そっと歯の表面をなでたり、歯茎をマッサージしたりします。もし嫌がるようなら、ガーゼに好物の魚汁などを付けて、なめさせながら行っていいでしょう。

こうして子猫が歯磨きに抵抗がなくなったら、ようやく歯ブラシの登場です。ペット用の小さい歯ブラシや指にはめるタイプの歯ブラシで、本格的な歯磨きを開始してください。



猫から人にうつる病気にも注意しましょう



猫から人にうつる主な病気

猫ひっかき病 (バルトネラ菌)

感染猫にかまれたり、ひっかかれたりすることで発症。数日～2週間後、傷口に丘疹や膿、水疱などができ、リンパ節の腫れや疼痛、発熱などの症状が見られます。

パストツレラ症 (パストツレラ菌)

猫のほぼ100%が保有するパストツレラ菌が原因。かまれたり、ひっかかれたり、猫の唾液が口に入ること感染。風邪や肺炎に似た呼吸器系の症状が出たり、傷口に激痛、発赤、腫れを起こしたりします。抵抗力の弱い人だけが発症する「日和見感染」です。

トキソプラズマ症 (トキソプラズマ原虫)

便の汚染物が口に入ること感染。通常は無症状ですが、妊婦が感染すると、流産や死産したり、生まれてくる子どもにも視力障害や脳障害が起こる場合があります。

瓜実条虫症 (瓜実条虫)

被毛に付いたノミ (中間宿主) が口に入ること感染。下痢や腹痛、肛門掻痒症などの症状が見られます。

回虫症 (ネコ回虫)

便の汚染物や、被毛に付いた虫卵が口に入ること感染。幼虫が肝臓や肺に侵入し、肝臓の腫れや咳、発熱などを起こすほか、まれに幼虫が目に移行して、視力障害の原因になることも。

ルールを守って、
飼い主さんも安心な生活を

「ズーノーシス (人獣共通感染症)」という言葉をご存じですか? ペットなどの動物から人にうつる病気のことです。

細菌やウイルス、寄生虫などの病原体を持つ動物になめられたり、ひっかかれたり、かまれたり、排泄物に触れたりすることで感染します。

猫からうつる可能性のある病気もいろいろあります。ズーノーシスに対する正しい知識、予防法を学んで、安心して猫ちゃんと暮らせるようにしましょう。



ズーノーシス予防のポイント

- 猫にキスをしたり、口移しで食べ物を与えたり、過剰なスキンシップは避ける。
- ひっかかれたり、かまれたりした時は、すぐに傷口の消毒を!
- なでたりだっこしたり、スキンシップをした後は必ず手を洗う。
- 外部・内部寄生虫の駆除・予防の徹底を。
- 猫だけでなく、周辺環境もつねに清潔に保つ。
- 外は様々な病原体に感染する危険が多いので、完全室内飼いがおすすめ。

